

アメリカの南北戦争中の1864年、D・H・ミッチェル医師は、負傷兵の治療を通じて、「人は痛みさらさらすることで気性が変化する。どんなに気立ての良い者でも怒りっぽくなり、闘士も臆病になる」と書き残しています。

古代ギリシャの哲学者、アリストテレスは、痛みは血管に沿って心臓に伝えられる「情動」であると唱え、17世紀のフランスの哲学者、デカルトは、痛みの「伝導路と反射」という説を唱えました。

その後、痛みの概念は変化を遂げ、1979年、国際疼痛学会が「感覚でもあり情動でもある」と定義しました。

感覚としての痛みだけでなく情動の要素を含んだ「痛み知覚」が心理・社会的因子によって変化・増幅されることで「苦悩」を形成。周囲に対する反応として「痛み行動」(痛みを起因とする行動様式)が生まれるという、痛みの多層モデルが提唱され、痛みが人格を変えてしまうといわれるようになりました。

技あり！
ほねつぎの
健康術

4

痛みは人格を変える?!

あっても半数以上の人が我慢しているわけです。

最近なぜかイライラする、という人は体のどこかに痛みがあるのではありませんか？治療を受けて痛みが緩和されれば、気持ちも和らぐかもしれませんね。

(森川伸治)



イラスト・長谷川貴一

|| 次回は6月7日掲載予定